写真１　住居と周辺の遺構

ふるさと御所 文化財探訪

⌘番外編⌘

観音寺本馬遺跡の発掘調査

生涯学習課文化財係
☎内線６９６

さきに8月号で紹介した観音寺本馬遺跡の発掘調査を現在も継続して実施しています。今月号ではシリーズの番外編として、その後の成果をご紹介します。なお、地元自治会のご理解ご協力のもと、昨年12月7日には現地説明会を開催し、多くの人に参加していただきました。酷寒酷暑の中で作業する私たちも報われる思いです。誠にありがとうございました。

さて、観音寺本馬遺跡は、今から約３０００年前、縄文時代晩期中ごろの遺跡で、平成20年度の調査では、地中に埋め込んだ柱材を今に残す、平地式住居（写真１）の発見が特筆されます。直径約９ｍの住居の中央付近には、調理をしたり暖をとるための炉が設けられ、その焼けた土には炭化したドングリなども残されていました。

この住居のすぐ東には土器棺墓（写真２）が３基まとまって設けられています。この墓に用いられた深鉢と呼ばれる土器は、大きいもので高さ41cmを測り、いずれも斜めの状態で埋められていました。骨は残っていませんでしたが、他の遺跡の例から乳幼児の墓の可能性が高いものとみられます。

写真２　穴に納められた土器棺墓

また、この住居周辺からは、土器、土偶、石器、漆塗り木製品などが出土しました。土偶は西日本の縄文晩期に特徴的な扁平なものです。うち１点（写真３）は口を大きく開いた表現の、全体の高さ11cmほどのもので、おなかいっぱい食べることができるように、との思いを込めて作られたのでしょう。

写真３　口を大きく開けた土偶

別の土偶は、高さわずか7cmほどと推定される小さなものですが、股間に女性器の表現が見られ、また、出土した石器のうち石棒は、男性器を表現したものです。縄文人にとっては、子どもが生まれ元気に育つことも大きな関心事であったことが分かります。土器棺墓を住居のそばに設ける風習も、同様の思いに発するものなのでしょう。

口を大きく開けた土偶に象徴されるように、縄文時代の西日本における食糧事情は決して良いものとは言えず、乳幼児の死亡率も高かったことでしょう。

観音寺本馬遺跡から２００～３００年後、西日本が急激に、稲作を伴う弥生文化に移行するのには、このような事情もあったとみられています。

編集後記

名柄小でプラネタリウムの取材をし、20年近く前の記憶が脳裏に蘇りました。氷点下10℃近くまで冷え込んだ晩秋の標高３千ｍ。北穂高岳の幕営場で、深夜テントを抜け出し、寒さに身を丸めながらも、星々で際限なく埋め尽くされた白い夜空を飽きることなく眺め続けていました。忘れられない青春の一コマです。(久)

広報ごせ

2009. 1

ふるさと納税

ありがとうございました

＊＊平成20年11月分＊＊

♥寄附件数　7件
※H20年度累計　27件

♥寄附金額　735,000円
※H20年度累計　1,583,300円

犬・猫は正しく飼いましょう！　★散歩させるときは、必ず袋とシャベル等を持ち、フンの後始末をしましょう。